

3 人材育成活動

□生涯学習分野

環境シンポジウム 「異常気象はまだ続くのかー温暖化から考えるー」

2014年11月30日(日)13時より、滋賀大学「環境学習支援士」会との共催で、環境シンポジウム「異常気象はまだ続くのかー温暖化から考えるー」が、滋賀大学大津サテライトプラザで行われた。このシンポジウムは今回で6回目であり、当日は、70名の方が参加し、大変盛況であった。

プログラムは以下のとおりである。

■開会の挨拶 橋田 卓也(滋賀大学「環境学習支援士」会理事長)

神部 純一(滋賀大学社会連携研究センター教授)

基調報告 地球温暖化の科学的検証

野沢 徹(岡山大学大学院教授)

話題提供 滋賀の気候変動

森岡 伸夫(彦根地方気象台調査官)

話題提供 「豊かさを実感できる持続可能な滋賀社会」の構築

ー市民参加と再生可能エネルギーー

金 再奎(滋賀県琵琶湖環境科学センター主任研究員)

質疑応答

■閉会の挨拶 佐瀬 章男(滋賀大学「環境学習支援士」会副理事長)

【シンポジウムの内容】

野沢先生は、「過去の気候はどのように変化してきたのか?」「そもそも、地球の気候はどのように決まっているのか?」「過去の気候変化の原因は?」「将来の気候はどう変化する?」について、データを示していただきながらわかりやすくお話いただいた。

森岡先生からは、滋賀の気候変動についてお話いただいた。彦根では、年平均気温は100年あたり約1.23℃の割合で上昇しており、1980年代に比べて最近10年間の気温の上昇が顕著であること、等の話があった。

最後に、金再奎先生からは、豊かさを実感できる持続可能な滋賀社会に向けての有効な施策の在り方についてお話いただいた。豊かさを感じる上で重要な要素は、地域内での活動を基本とした「つながりを深める」ことであり、つながりを深めることは、「低炭素化」と「地域経済の活性化」とも両立するという。

また、滋賀県再生可能エネルギー普及の在り方については、将来の地域社会の在り方そのものと一緒に考える必要があり、そして市民自らが地域課題解決に向けて導入を行う「市民共同方式」が有効だということであった。

【参加者の評価】

参加者は、「60代以上」の人が89%を占めていた。また、「大津市」の居住者が44.7%でもっとも多かったが、大阪、京都等、「滋賀県外」からの参加者も全体の27%を占めていた。

参加者のシンポジウムに対する評価であるが、91%の人が「満足した」、「やや満足した」と回答しており、全体的な満足度は高かったようである。

シンポジウムについて満足した理由としては、「最新情報をベースにわかりやすく理解できた」、「自分の地球温暖化防止対策について再確認でき、今後も実行を推進することを、将来の温暖化に対して生きていくことを考えていく」、「気候変動と地球温暖化の影響が科学的によく理解できた。滋賀県の気候の現状と環境への取り組みがよくわかった」といったものがあった。

(文責 教授 神部 純一)

